

初等教育教員養成校における領域・表現の 実践的教材研究に関する報告

A report on the study of practical teaching materials for Expression
in course of primary education

伊 藤 寿 美

Kazumi ITOH

1. 目的

平成30年4月1日に幼稚園教育要領が改訂され、「幼稚園教育において育みたい資質・能力」および「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」が総則に加わった。それにより、幼稚園で身につけるべき内容が具体化され、また幼稚園修了時の具体的な姿を、小学校での各教科の特質に応じた学びにつなげていくことが求められるようになった。

この幼稚園教育要領の改訂は、新しい幼稚園教育要領の狙いと内容に沿ったカリキュラムを計画し、幼児・児童の身近にある物事に興味・関心を持たせ、一人一人に合った表現の仕方を引き出すことへのきっかけ作りができる教員を養成する上で、筆者が担当する領域・表現の授業をより実践的な授業内容とするための再考の機会となった。再考するにあたり、これまでの授業内容を見直したところ、変更が必要なものばかりではなく、学生たちの取り組みの様子から気付かされたことや、学生たちの独自の工夫も多くあった。

そこで、これまでの授業における学生の取り組みの様子と、現場での利用に関する提案などをこの報告書に纏めることとする。

2. 授業内容について

初等教育教員養成校（以下養成校とする）には、高等学校の単位を修得した者が在籍しているが、現在の高等学校の教育過程では、美術は「芸術」の中の1科目であり、高校生が履修する際は、芸術関連の音楽、書道、工芸、美術の4科目の中から選択必修となっている。また、その中でどの科目を設置するかは各学校に一任されている。そのため個人によっては、美術の授業を受講するのは中学校卒業以来となる場合がある。さらに、小学校の図画工作と中学校の美術の授業内容は教科担任が決定するため、各学生の美術経験は全く違っている。さらに初等教育に必要な図画工作・美術に関する基礎的な知識や技法を知らないまま進学している者もある。

それらを踏まえると、養成校の図画工作および美術の授業では、教育現場での幼児や児童と同じ課題に取り組み、基礎的な知識や技法を再度学び直す機会とする必要がある。それに加え、身近な素材を工夫することや作品の完成度を高めるにはどこまで仕上げたらよいかなど、教員としての姿勢の習得も必須である。

筆者の授業では教員を養成する授業として

以下の内容を実施している。但し、この授業課題は、本報告に記載していないものも含め、本学金城学院大学の野村和弘氏が立案されたものである。領域・表現での項目全てが網羅されており、素材研究と知識・技術の習得に役立つものとなっている。

本報告に記載する授業課題

- (1) グリーティングカード
- (2) 自画像
- (3) 紙粘土
- (4) 仮面
- (5) 衣装
- (6) フィンガーペインティング
- (7) ボール転がし

何れの課題も応用次第で幅広い年齢で実施可能な課題である。制作にあたり、年齢相応の内容で制作することを条件とし、教員としての技術を養い、使用する素材を探究することを目標とした。

次項では、授業内容の詳細として課題ごとに①課題の概要②狙いと到達目標③学生の取り組み姿勢などを記していく。

3. 授業内容の詳細

(1) グリーティングカード

① 飛び出す仕掛けのあるカードの制作

大きさ：八つ切画用紙2分の1以上

カードを入れる封筒も制作する

形・素材：カードと封筒共に自由

テーマ：自由

② 年齢に合わせて仕組みを加減することが可能な課題であり、多様性が見込まれる。仕組みの理解と工夫が必須であり、また使用素材の探究だけでなく、デザインによっては分度器やコンパスなど様々な道具が必要となる為、道具の扱いや活用方法の工夫について考えることができる。

③ 仕掛けを知るために、図書館で本を借りて

持参する者、試作品を作り、仕掛けを複合させて作る者など、それぞれにこだわって制作をしていた。また、大きさ以外は制約をつけず、送る目的も自由としたことから、様々な形の作品が出来上がり、飾り付けの素材にも美容関連品を使用するなどジャンルに囚われず、制作に取り入れることができていた。

(2) 自画像

① 自分らしい表情を捉えた自画像の制作

② 幼児・児童の絵画作品には、感情や感動を豊かな表情で表現しているものが多い。その反対に、様々な要因によって、うまく表出できない幼児・児童もいる。その場合には表出方法を探り、個々に合わせて支援することが、教員としての役割である。その為にも、自らを探る姿勢と、描画技術を身に付けることが必須となる。この課題では、固定ポーズではなく、生き活きとした表情や動きのある自画像を描くための探究と技術を身に付けることを目標としている。

③ 自分らしい表情を探す方法として、写真撮影や友人との写真の交換を行っている者がいた。制作面においては描画のほか、ガラス面を表現するために台所用品を使うなど、既成概念に捉われず幅広く表現方法を工夫する姿が見られた。

(3) 紙粘土

① 実物を見ながら、本物そっくりのお菓子を作る。

② 粘土は初等教育の造形活動には欠かせない素材である。その柔らかさから手指が未発達な年齢においても容易に形を変えることができ、感触遊びとしても親しみやすい。

この課題については形による造形だけでなく、彩色についても探究するように求めた。先に述べたように美術経験の少ない学生もあり、色彩の基礎知識を習得することもねらいとした。

③色の再現の第一段階として粘土に絵の具を練り込む様指示し、成形後にも焦げ目などの色の再現を追究させた、絵の具の調具合を把握することに時間を要する学生もおり、日常何気なく目にしている物が複雑な色で出来上がっていることを知る機会となった。また、形や色の再現に必要な道具についても、スポンジやフォークなどの食器を使用して、探究する姿が見られた。

(4)お面

①日本の伝統技法である張り子を応用して、画用紙を使用した芯材を組立て、和紙を張り込んでお面を作る。

②お面制作は、幼稚園で提案されることの多い課題である。通常、幼稚園では風船を芯材にしていることが多い。また、小学校では市販の顔型の芯材を使用しているようである。この課題では、紙の特性を理解し、イメージ通りの立体に組立てる方法を探求できると、立体に着色する時の注意点を知り、丁寧に細部まで着色することができることを目標にしている。

③細い短冊状に切断した画用紙をホチキス留めで繋ぎ合わせ、格子状に組むことで立体の形を作り出し、それを芯材にして新聞紙と障子紙を張り込んで仮面を制作した。

学生は、動物や人間の顔を立体で再現するために、全体を見渡しながらかぎを把握し、それを形に表す為の試行錯誤を繰り返していた。

また本課題はデザインの領域も含み、着色において細部にわたって明確に形や色を表現し、丁寧な作り込みを追究していた。

(5)衣装

①障子紙を使って衣装を作り、実際に着用して作品発表を行う。

②幼稚園や小学校では、行事として劇発表を行う場合が多く、それを考慮してファッショ

ンショーの形でグループ発表をさせた。この課題では、障子紙の特性を知り、それを生かした作品作りをすることができることと、実際に着用する上での機能性やデザイン性を追究することができることを目標とした。

③学生が、グループ編成、テーマ、音楽、ショー構成を協議し、自ら着用する衣装をデザインし自作してショーに臨んだ。

学生の一人が、祖母から「和紙は揉むと丈夫になる」と聞いてきたことから、始めに皺を作ってから使用するようになった。また、着色する場合、大量に絵の具が必要となることから、絵の具を溶かした色水で染め始めた学生がおり、それ以来染色する方法が引き継がれている。

(6)フィンガーペインティング

①粉絵の具とでんぷん糊を混ぜたものを5～6色用意し、大きな紙の上に置いて指で混色して遊ぶ。

②幼児期は手から伝わる感触に敏感であり、その感触そのものを楽しむことができる。フィンガーペインティングは、紙の上で大きく腕を動かすことで絵の具が動き、その軌跡を楽しむことができるだけでなく、色の変化も視覚的に楽しむことができる課題である。

この課題では、幼児と同じように手から伝わる感触と絵の具が混ざっていく様子を楽しむことで、形の良し悪しに囚われず、感覚を養う気持ちを持つことができることを目標とした。

③指絵の具を触る前は、遠巻きに見ていた学生たちも、しばらくするとハートなどの記号を描き、指をクルクル動かして模様を描くなど子どもと同じように遊んでいた。

活動の最後は、気に入った箇所用紙に摺り取り、モノプリントを記録として残した。

(7)ボール転がし(ビー玉転がし)

①大きく浅い箱に紙を敷き詰め、濃い目の絵

の具を付けたボールをいれ、箱の中で転がし、その軌跡を楽しむ。箱の大きさに合わせてボールの数や人数を変える。

②通常はビー玉を使用して行うことが多いが、ボールに変え箱を大きくすることで、複数人で遊ぶことができる。ボールでの造形遊びに関する狙いのほか、ボールを落とさないようにゆっくり動かすなど、協力して箱を動かすために必要な目標を立てることができる。春の新しいクラスで協調性を築きたい時や、梅雨時に外で遊ぶ機会が少なくなった時に、室内でゲーム性を取り入れても良く、学生には指導者の立場での留意点も考えながら取り組むことを狙いとしている。

③ボールは、テニスボール、ゴルフ練習用の硬いスポンジのボールを用意した。箱は縦約40センチ×横約60センチ×厚み約10センチ、縦横約90センチ×厚み約15センチの2種類とした。前期の1年生のクラスであった為、知り合ったばかりのクラスメイトと課題に取り組むことで、②で述べた協調性を築くきっかけ作りを体現した。

4. おわりに

養成校において筆者の実施している実践的な素材研究を目的とした授業内容の一部を記述したが、新しく改訂された幼稚園教育要領では、「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」と明記されている。幼児期に様々な環境に触れることは、豊かな感性を育む為に不可欠であり、養成校に学ぶ学生へも同じように学びの機会を作ることが、今後の授業内容の再考において考慮すべきことであろう。

また、最近の情報機器の発展と普及を考えると、初等教育の学習内容に取り入れていくことも必要であり、その為には養成校におい

ても授業の中で学生が実践できる内容を組み入れていく必要がある。

今回新しく幼稚園教育要領が改訂されたことから本報告を記したが、今後も将来を担う子どもたちを育てていくより良い指導者を養成するために、筆者自らも更なる研鑽に励みたい。

謝辞

この度の執筆にあたり、金城学院大学の日比野直子先生には、執筆内容について丁寧に助言を賜り、また推薦書を書いていただき、感謝申し上げます。

また野村和弘先生には、授業内容について細部にわたり設定してくださり、また、助言を賜り、感謝申し上げます。

引用文献

文部科学省「幼稚園教育要領」平成29年3月告示
文部科学省「幼稚園教育要領解説」平成30年2月告示